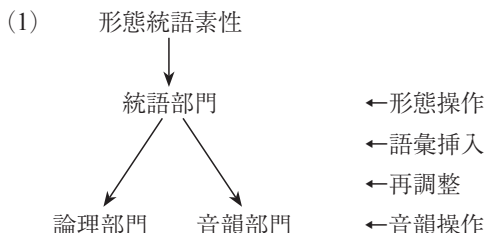


## 25 分散形態論

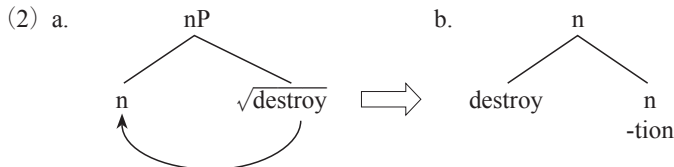
Halle and Marantz (1993) が提唱している形態論。この理論では、語形成は専用の形態部門ではなく、統語部門と音韻部門で行われる。この理論は、このように2つの部門に「分散」して語形成を行うため、**分散形態論 (Distributed Morphology, DM)** と呼ばれる。

具体的には、(1) の流れで語形成が行われる。



統語部門で形態統語 (morphosyntactic) 素性を併合 (merge) して構造を構築した後、**形態的結合 (morphological merger)** をはじめとした複数の形態操作を経て、**語彙挿入 (lexical insertion)** が行われる。その後、必要に応じて**再調整 (readjustment) 規則**の適用を受けてから音韻部門に送られる。さらに、必要に応じて音韻部門でいくつかの音韻操作を受けて最終的に発音可能な「語」として具現化される。構造構築の最初の段階では「語」は存在せず、形態統語素性と範疇未指定の語根 (root) (Marantz 1997) のみが存在する。

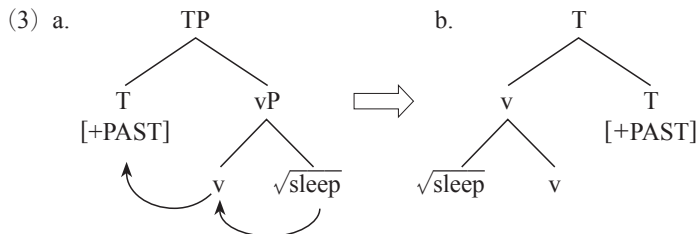
まず、派生語の例として、名詞 *destruction* の派生を考えてみよう。(2) において、 $\sqrt{\text{destroy}}$  は名詞 *destruction* の語根を示し、*n* は名詞を形成する機能範疇を示す。(2a) は両者が併合した時点の統語構造である。 $\sqrt{\text{destroy}}$  が *n* と形態的に結合した後、語根に *destroy* が、*n* に *-tion* が語彙挿入されることで (2b) の構造が得られる。(2b) は (2a) の主要部のみを抜き出して示している。



(2b) の *destroy* は再調整規則が適用され、*destruc* となり、全体として最終的に発音可能な語 *destruction* として具現化される。

次に、屈折語の例として、英語の動詞 *sleep* の過去形 *slept* の派生を考えてみよう

う。(3)において、 $\sqrt{\text{sleep}}$ は動詞sleepの語根であり、vは動詞を形成する機能範疇である。Tには過去を表す素性[+PAST]が示されている。(3a)はこれらが併合した時点の統語構造であり、これら三者が形態的に結合することで(3b)が得られる。(3b)は(3a)の主要部のみを抜き出して示したものである。



(3b)の語根にsleepが、vに空の要素( $\emptyset$ )が語彙挿入される。T [+PAST]への語彙挿入は次の規則に従って行われる。

(4) a. [+PAST]  $\Leftrightarrow \emptyset / X_+ (X=\text{become, cost, grow, ...})$

b. [+PAST]  $\Leftrightarrow /-t/ / Y_+ (Y=\text{burn, feel, sleep, ...})$

c. [+PAST]  $\Leftrightarrow /-d/$

規則(4a)は、becomeやcost, growといった動詞の場合、過去を表す接尾辞が空要素として具現化することを表している。同様に規則(4b)は、burnやfeel, sendといった動詞の場合、過去を表す接尾辞が-tとして具現化することを示している。一方、規則(4c)は(4a, b)で指定されている動詞以外のすべての動詞に適用される。どの規則が選ばれるかは、**非該当原理 (elsewhere principle)** (Kiparsky 1973)によって決定される。この原理に基づくと、より環境指定の多い規則が環境指定の少ない規則に優先される。従って、動詞sleepの場合は(4a, c)ではなく(4b)が適用され、接尾辞-tが選ばれる。sleepは再調整規則によってslepとなり、全体として最終的に発音可能な語slepとして具現化される。

分散形態論では、この他にいくつかの操作が提案されている。例えば、Halle and Marantz (1993)では、複数の接点を1つの接点へと変換する**融合 (fusion)**や、逆に1つの接点を複数の接点へと変換する**分裂 (fission)**が提案されている。

(佐藤 亮輔)